

生活科の内容の見直しに係る考察

戸田 浩暢

(2017年10月6日 受理)

Consideration of the Revised Section of Living Environment Studies

Hironobu TODA

Abstract

Living Environment Studies in the Course of Study for Elementary Schools was announced in March, Heisei 29 (2017), based on the report “Regarding the improvements and necessary measures of Courses of Study for Kindergarten, Elementary Schools, Lower Secondary Schools, Upper Secondary Schools, and Schools for Special Needs Education” published by the Central Council for Education on 21 December, Heisei 28 (2016). This article analyzes this revised section of Living Environment Studies from three points of view: first, characteristics of largely modified goals; second, review of the contents; and third, the issues related to teaching performance for Living Environment Studies. Finally, this article presents an improved teaching plan for ideal classes.

1. 生活科の改訂

平成28年12月21日に中央教育審議会より答申された、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（以下「答申」と記す）等を受け、平成29年3月31日に次期小学校学習指導要領が告示され、平成32年4月1日から施行される。

1989（平成元）年に創設された、小学校第1学年及び第2学年において実施される比較的新しい教科である生活科の今次の改訂はどのようなものであるのだろうか。

生活科に関する学習指導要領は、今まで、1989（平成元）年・1998（平成10）年・2008（平成20）年に告示されてきたが、その目標を示すと、「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。」（1989

(平成元)年)・「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。」(1998(平成10)年)・「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。」(2008(平成20)年)となっている。

1989(平成元)年に初めて出された目標から、2008(平成20)年の2度目の改訂まで、身近な「人々」という文言が加えられただけで、大きな変化はみられていないことが分かる。

今次改訂においては、生活科の目標に大きな変化がみられ、内容は大幅な見直しがなされている。本稿では、「答申」の記述に基づきながら、大幅に変更された生活科の目標の構造や内容の見直し及び生活科の授業実践に係る課題について考察し、今後望まれる授業に関してより改善された指導計画を提示したい。

2. 生活科の目標

従前の目標は、「(1) 具体的な活動や体験を通して」「(2) 自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心を持ち」「(3) 自分自身や自分の生活について考えさせるとともに」「(4) 生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ」「(5) 自立への基礎を養う」の5つの要素によって構成されている。この5つの要素は、(1)と(5)の間に(2)(3)(4)が組み込まれた構成になっている。

従前の目標に対し、今次改訂された生活科の目標は次のように示されている。

具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。
- (2) 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。
- (3) 身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。

このように、「具体的な活動や体験を通して」、「生活上必要な習慣や技能を身に付け」「自分自身や自分の生活について考え」以外は新たな文言が付け加えられ、「自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり」という箇所が変更されている。

今度も残された目標の文言の意味するところは、従前の目標の趣旨で示されたものと変わらないのではないかと考えられる。

具体的な活動や体験とは、「例えば、見る、聞く、触れる、作る、探す、育てる、遊ぶなどして直接働きかける学習活動であり、また、そうした活動の楽しさやそこで気付いたことなどを言葉、絵、動作、劇化などの方法によって表現する学習活動」¹⁾ のことであると考えられる。また、生活上必要な習慣や技能とは、「生活上必要な習慣には、健康や安全にかかわること、みんなで生活するためのきまりにかかわること、言葉遣いや身体の振る舞いにかかわることなどがある。例えば、次のようなことが考えられる。・生活のリズムを整える・病気の予防に努める・安全への意識を高める・道具や用具の準備、片付け、整理整頓ができる・遊びのルールを守る・施設や公共の場所のルールやマナーを守る・時間を守る・適切なあいさつや言葉遣いができる・訪問や連絡、依頼の仕方を知るなど（中略）生活上必要な技能には、手や体を使うこと、様々な道具を使うことなどがある。例えば、次のようなことが考えられる。・手や体を使って友達と仲良く遊ぶ・必要な道具を使って遊んだり、ものを作ったりする・動物や植物の世話ができる・電話や手紙などを使って連絡するなど」²⁾ のことであると考えられる。そして、自分自身や自分の生活について考えることとは、「第1は、集団生活になじみ、集団における自分の存在に気付くことである。（中略）第2は、自分のよさや得意としていること、また、興味・関心をもっていることなどに気付くことである。（中略）第3は、自分の心身の成長に気付くことである。」³⁾ のことであると考えられる。

一方、従前の目標を最も端的に表現すれば、「具体的な活動や体験を通して、自立への基礎を養う。」となるが、今次の改訂においては、「自立への基礎を養う」という文言が変更されている。自立への基礎を養うことに関しては、「ここでいう自立とは、以下に述べる三つの自立を意味している。第1は、自分にとって興味・関心があり、価値があると感じられる学習活動を自ら進んで行うことができるということであり、自分の思いや考えなどを適切な方法で表現できるという学習上の自立である。第2は、生活上必要な習慣や技能を身に付けて、身近な人々、社会及び自然と適切にかかわることができるようになり、自らよりよい生活を創り出していくことができるという生活上の自立である。第3は、自分のよさや可能性に気付き、意欲や自信をもつことによって、現在及び将来における自分自身の在り方に夢や希望をもち、前向きに生活していくことができるという精神的自立である。」⁴⁾ と示されており、改訂された目標にある「自立し」は同様のことであるとは考えられる。今までも、「生活科の学習は、中・高学年から始まる社会科・理科や『総合的な学習の時間』の基礎となるだけでなく、学習の仕方や生活の仕方の基礎を学ぶという点では、すべての学習や生活の土台づくりを担うものと捉えることができよう。」⁵⁾ として、生活科教育のアイデンティティの第1にあげられており、これに加

え、新たに「生活を豊かにしていくための資質・能力」を育成することを目指すことが示された。今次改訂された生活科の目標は、なぜこのような大幅な変更がなされたのであろうか。

3. 資質・能力の三つの柱と目標

生活科の今次改訂の基盤は、「答申」にある。「答申」において、育成を目指す資質・能力に関し、「全ての資質・能力に共通し、それらを高めていくために重要となる要素は、教科等や直面する課題の分野を越えて、学習指導要領等の改訂に基づく新しい教育課程に共通する重要な骨組みとして機能するものである。こうした骨組みに基づき、教科等と教育課程全体のつながりや、教育課程と資質・能力の関係を明らかにし、子供たちが未来を切り拓ひらいていくために必要な資質・能力を確実に身に付けられるようにすることが重要である。海外の事例や、カリキュラムに関する先行研究等に関する分析によれば、資質・能力に共通する要素は、知識に関するもの、スキルに関するもの、情意（人間性など）に関するものの三つに大きく分類されている。前述の三要素は、学校教育法第30条第2項が定める学校教育において重視すべき三要素（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」）とも大きく共通している。」⁶⁾とし、第1の柱として、「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」、第2の柱として、「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」、第3の柱として、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」が示され、この三つの柱に基づいて教育課程の枠組みを整理してある。

第1の柱に関しては、「各教科等において習得する知識や技能であるが、個別の事実的な知識のみを指すものではなく、それらが相互に関連付けられ、さらに社会の中で生きて働く知識となるものを含む（中略）技能についても同様に、一定の手順や段階を追って身に付く個別の技能のみならず、獲得した個別の技能が自分の経験や他の技能と関連付けられ、変化する状況や課題に応じて主体的に活用できる技能として習熟・熟達していくということが重要」⁷⁾であるとし、単なる知識・技能の習得ではなく、変化の激しい社会で有用に活用できる知識・技能を指している。第2の柱に関しては、「将来の予測が困難な社会の中でも、未来を切り拓いていくために必要な思考力・判断力・表現力等」⁸⁾として、従前から育成を強く求められてきた資質・能力より明確に表している。第3の柱に関しては、「情意や態度等を育てていくためには、体験活動も含め、社会や世界との関わりの中で、学んだことの意義を実感できるような学習活動を充実させていくことが重要」⁹⁾であるとし、第1・2の柱の資質・能力を働かせていく重

要な要素としている。

今次改訂された生活科の目標は、このような三つの柱に基づいて整理され、設定された。

第1の柱に関しては、生活科では、「活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。」としている。従前では、「自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心をもち」として、「自分と身近な人々」・「自分と社会」・「自分と自然」のかかわりに関心を持つことのみが示されていたが、今次の改訂においては、「答申」に対応して「自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付く」とし、単に自分と自分を取り巻く環境とのかかわりにとどまらず、「自分自身」・「身近な人々」・「社会」・「自然」の「特徴やよさ」に気付くことが求められている。また、「それらの関わり等」にも気付くことが求められている。従前と比較して、「何を理解しているか」という観点がより明確になり、生活科特有の「気付き」に関して発展性がみられる。

第2の柱に関しては、「身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。」としている。従前では、「自分自身や自分の生活について考えさせる」ことのみが示されていたが、今次の改訂においては、「答申」に対応して「身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え」と、思考力の育成に関して明確な視点が示されている。また、新たに、「表現することができるようにする」という文言も付け加えられ、表現力の育成に関しても明示されている。

第3の柱に関しては、「身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。」としている。従前では、このような文言は示されておらず、まさに、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」を具体化して示されてある。

各学年の目標に関しても、大幅な見直しがなされている。従前は4つの項目が示されていたが、今次では「答申」の三つの柱に基づき、3つの項目に整理してある。

1点目の目標は、「学校、家庭及び地域の生活に関わることを通して、自分と身近な人々、社会及び自然との関わりについて考えることができ、それらのよさやすばらしさ、自分との関わりに気付き、地域に愛着をもち自然を大切にしたり、集団や社会の一員として安全で適切な行動をしたりするようにする。」とされ、三つの柱に対応して、「自分と身近な人々、社会及び自然との関わりについて考えること」ができるようになることが求められるとともに、「それらのよさやすばらしさ、自分との関わりに気付く」ことが求められている。また、「地域に愛着をもち自然を大切に」することに関しては、従前の表現を多少変えて残されている。「集団

や社会の一員として安全で適切な行動」することに関しても同様である。

2点目の目標は、「身近な人々、社会及び自然と触れ合ったり関わったりすることを通して、それらを工夫したり楽しんだりすることができ、活動のよさや大切さに気付き、自分たちの遊びや生活をよりよくするようにする。」とされ、三つの柱に対応して、「楽しんだりすることができ、活動のよさや大切さに気付くことが求められるとともに、「自分たちの遊びや生活をよりよくするようにする」ことが求められている。

3点目の目標は、「自分自身を見つめることを通して、自分の生活や成長、身近な人々の支えについて考えることができ、自分のよさや可能性に気付き、意欲と自信をもって生活するようにする。」とされ、三つの柱に対応して、「自分自身を見つめることを通して、自分の生活や成長、身近な人々の支えについて考えること」ができるようになることが求められている。

4. 生活科の課題

前節で、「答申」の三つの柱に対応して、目標及び学年の目標が整理されたことを述べたが、改訂された生活科の目標に関わって、今後課題とされることは何であろうか。

「答申」では、現行の学習指導要領の成果に関して、「生活科は、児童の生活圏を学習の対象や場とし、それらと直接関わる活動や体験を重視し、具体的な活動や体験の中で様々な気付きを得て、自立への基礎を養うことをねらいにしてきた。現行学習指導要領では、活動や体験を一層重視するとともに、気付きの質を高めること、幼児教育との連携を図ることなどについて充実を図った。各小学校においては、身近な人々、社会及び自然等と直接関わることや気付いたこと・楽しかったことなどを表現する活動を大切にする学習活動が行われており、言葉と体験を重視した改訂の趣旨がおおむね反映されているものと考えられることができる。」¹⁰⁾と整理している。確かに各小学校において、活動や体験を重視する授業が展開され充実が図られてきている。また、生活科が創設された当初から気付きの質を高めることに関して多くの実践・研究がなされ、共有化されてきている。幼児教育との連携を図ることに関しても、「保・幼・小連携」が社会的にも求められており、近年、充実されてきている。身近な人々、社会及び自然等と直接関わることも、積極的に行われている。気付いたこと・楽しかったことなどを表現する活動を大切にする学習活動も多様に展開されている。

一方、次の4つの点¹¹⁾に関しては、更なる充実を図ることが課題としてあげられている。

1点目は、「活動や体験を行うことで低学年らしい思考や認識を確かに育成し、次の活動へつなげる学習活動を重視すること。『活動あって学びなし』との批判があるように、具体的な活動を通して、どのような思考力等が発揮されるか十分に検討する必要がある。」という課題

である。「活動や体験を行うことで低学年らしい思考や認識を確かに育成」することが求められているが、生活科が創設されて以来、様々な「活動や体験」が積み重ねられており、その成果を活用することは当然として、「低学年らしい思考や認識」に関しては、まだ十分には明らかにされてないのではなかろうか。「確かに育成」を目指すのであれば、活動や体験がどのような低学年らしい思考や認識を育成するのかを明確にしておく必要がある。また、単元毎の活動や体験で育まれる思考や認識の関わりや発展についても明らかにした上で実践することが求められる。

2点目は、「幼児教育において育成された資質・能力を存分に発揮し、各教科等で期待される資質・能力を育成する低学年教育として滑らかに連続、発展させること。幼児期に育成する資質・能力と小学校低学年で育成する資質・能力とのつながりを明確にし、そこでの生活科の役割を考える必要がある。」という課題である。「幼児期に育成する資質・能力と小学校低学年で育成する資質・能力とのつながりを明確」にすることが求められているが、「幼児期に育成する資質・能力」や「小学校低学年で育成する資質・能力」に関しては、一定程度の指標が明らかにされている。例えば、「学び」に関して、幼児期は「学びの芽生え」とし、「楽しいことや好きなことに集中することを通して、様々なことを学んでいく。遊びを中心として、頭も心も体も動かして様々な対象と直接関わりながら、総合的に学んでいく。日常生活の中で、様々な言葉や非言語によるコミュニケーションによって他者と関わり合う。」¹²⁾と示されている。また、児童期は「自覚的な学び」とし、「学ぶことについての意識があり、集中する時間とそうでない時間（休憩の時間等）の区別が付き、自分の課題の解決に向けて、計画的に学んでいく。各教科等の学習内容について授業を通して学んでいく。主に授業の中で、話したり聞いたり、読んだり書いたり、一緒に活動したりすることで他者と関わり合う。」¹³⁾と示されている。このような資質・能力の繋がりを明確にし、生活科の果たすべき役割を明確にしなければならないが、小学校低学年の場合、個々人の発達に大きな差があり、より個別的な対応が求められている。

3点目は、「幼児教育との連携や接続を意識したスタートカリキュラムについて、生活科固有の課題としてではなく、教育課程全体を視野に入れた取組とすること。スタートカリキュラムの具体的な姿を明らかにするとともに、国語、音楽、図画工作などの他教科等との関連についてもカリキュラム・マネジメントの視点から検討し、学校全体で取り組むスタートカリキュラムとする必要がある。」という課題である。スタートカリキュラムに関しては、基本的な考え方として、「一人一人の子供の成長の姿から編成しよう。子供の発達を踏まえ、時間割や学習活動を工夫しよう。生活科を中心に合科的・関連的な指導の充実を図ろう。安心して自ら学びを広げる学習環境を整えよう。」¹⁴⁾といったことが示されており、スタートカリキュラムのマ

ネジメントに関しても、「校内組織を立ち上げて準備しよう→全校で協力体制を組みスタートカリキュラムに取り組もう→子供の姿・指導の在り方を語り合おう→時期を捉えて、反省・検証・改善しよう」¹⁵⁾と示されている。スタートカリキュラムに関しては、学校全体として取り組まなければならない課題である。

4点目は、「社会科や理科，総合的な学習の時間をはじめとする中学年の各教科等への接続が明確ではないこと。単に中学年の学習内容の前倒しにならないよう留意しつつ，育成を目指す資質・能力や『見方・考え方』のつながりを検討することが必要である。」という課題である。中学年の各教科等への接続を明確にすることと、「育成を目指す資質・能力や『見方・考え方』のつながりを検討すること」が求められている。その際，生活科の特質に応じた「身近な生活に関わる見方・考え方」として，「身近な人々，社会及び自然を自分との関わりで捉え，比較，分類，関連付け，試行，予測，工夫することなどを通して，自分自身や自分の生活について考えること」¹⁶⁾が示されており，具体的な活動や体験における「比較，分類，関連付け，試行，予測，工夫すること」で育成する資質・能力を明らかにする必要がある。

5. 改訂された生活科の授業事例

今次改訂された生活科に関して目標の構造や課題についてみてきたが，今後望まれる授業に関して考察をしていきたい。

ここでは，生活科の改訂を主導した文部科学省初等中等教育局視学官の田村学氏が編著者となった、『生活・総合 アクティブ・ラーニング』の中で提示してある授業を取り上げて，その特長を改訂された目標と見比べるとともに，より望ましい授業構成について考えていきたい。

取り上げるのは，「がっこう だいすき たんけんたい」の授業¹⁷⁾である。

授業の指導計画は表1（稿者一部改変）である。

本授業は単元を3部構成にして20時間掛けて行われている。第1部では，単にみんなで学校の中を歩く活動である。指導者は，「学校の広さを味あわせることで，学校に対する興味を抱けるようにする」ことを企図している。第2部では，最初に「はじっこ」の定義を意図的に確定せず，学校の「はじっこ」を探しに行く活動から始まる。それぞれの考える「はじっこ」について交流し，その違いに対して疑問が湧くように仕組んである。その後，「はじっこ」を「もうもどるしかないところ」という定義で確定し，みんなで決めた「はじっこ」をもう一度探しに行く活動を行っている。この活動を行う中で，子供たちは他の学年の学習活動や学校での先生以外の仕事など，いろいろなことに興味を持つようになる。第8～10時では，階を決めて探検を行い，第11～14時では，興味別に探検を行う。階を決めて探検を行う際には，3時間で全

表1 「がっこう だいすき たんけんたい」の指導計画

単元名：「がっこう だいすき たんけんたい」	
本単元の目標：学校の施設の様子及び先生など学校生活を支えてくれる人々や友達のことがわかり、楽しく安心して遊びや生活ができるようにするとともに、繰り返し探検することを通して学校での自分の生活を豊かに広げていけるようにする。	
1 がっこうにどんなところがあるのかな	
第1～2時	学校の中をみんなで歩いてみる。
第3時	感想を交流する。
2 じぶんたちだけでたんけんしてみよう	
第4時	学校の「はじっこ」を探しに行く。
第5時	「はじっこ」の定義について話し合う。
第6時	「はじっこ」ってどんなばしょだろう？
第7時	みんなでできた「はじっこ」をもう一度探しにいこう。
第8～10時	階をきめてたんけんをする。
第11～14時	興味別にたんけんをする。
3 きいて！ほくの、わたしのがっこうたんけん	
第15～16時	みんなで集めた情報を伝え合う。
第17～18時	友達の発表を聞いて、気になったところをもう一度探検する。
第19時	おうちの人へ向けて学校たんけん発表会をする。
第20時	これからの学習の計画を立てる。

での階に行かせることにしてある。その理由として、「各階で見えてきた情報を1時間ごとに交流することで、すべての階の『ひと、もの、こと』にクラス全員が興味を示してほしいと考えた」からである。また、興味別に探検を行うことで、気付きの質を高めるように設定してある。第8～14時の計7時間に及ぶ学校探検活動で子供たちは教職員とも触れ合い、コミュニケーション能力を育成する状況も設定してある。第3部の第15～16時では、各自が集めてきた情報を共有するため校内地図を作成し、互いに認め合ったり、比べたりすることができている。第17～18時では、気付きの質を高めるため、「友達の発表を聞いて、気になったところをもう一度探検する。」という学習活動を取り入れている。最後に保護者対象に発表会を行って、頑張っている自分を認めてもらい自己肯定感を高めることや、プレゼンテーション能力を高める活動も設定してある。

この授業を、改訂された目標と見比べた場合、「(1) 学校探検の活動や体験の過程において、自分自身、身近な友達、教職員の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、学校生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする」・「(2) 学校の中で身近な友達、教職員を自分と

の関わりで捉え、自分自身や自分の学校生活について考え、地図化や発表等で表現することができるようにする。」・「(3) 学校の中で身近な友達、教職員に話をするなど自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり学校生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。」と表現することができる。

一方、より望ましい授業構成について、次の3点が考えられる。

1点目は、着目点についてである。第1部において「学校の広さを味あわせることで、学校に対する興味を抱けるようにする」ことを企図して漫然と学校の中を歩くようになっている。より望ましい指導としては、教師から、「学校の中にはどのような教室や物があるか、またどのような人がいるか確認しながら歩いてみましょう。歩く中で疑問に思ったことはメモをしましょう。」と指示するなどし、具体的な着目点を与える方が、子供たちは興味・関心を持って

表2 改善された「がっこう だいすき たんけんたい」の指導計画

単元名：「がっこう だいすき たんけんたい」	
本単元の目標：学校の施設の様子及び先生など学校生活を支えてくれる人々や友達のことがわかり、楽しく安心して遊びや生活ができるようにするとともに、繰り返し探検することを通して学校での自分の生活を豊かに広げていけるようにする。	
1 がっこうにどんなところがあるのかな	
第1～2時	学校の中にはどのような教室や物があるか、またどのような人がいるか確認しながら歩く。疑問に思ったことはメモを取る。
第3～4時	感想を交流し、疑問点を発表して共有する。
2 じぶんたちだけでたんけんしてみよう	
第5時	疑問点に関して自分の意見を発表し、共有する。
第6～7時	疑問点を解消するために学校を探検する。
第8時	疑問点に関して分かったことを発表し合う。
第9時	新たな疑問点を発表して共有する。
第10～11時	疑問点を解消するために学校を探検する。
第12時	疑問点に関して分かったことを発表し合う。
第13～14時	さらに追究したいことを決め、興味別に探検をする。
3 きいて！ほくの、わたしがっこうたんけん	
第15～16時	みんなで集めた情報を伝え合う。
第17～18時	友達の発表を聞いて、情報の確認と疑問点の解消するところをもう一度探検する。
第19時	おうちの人へ向けて学校探検の発表会をする。
第20時	これからの学習の計画を立てる。

校内を歩くようになるのではなかろうか。第3時が、単なる感想の交流になっているが、ここでは2時間取り、感想の交流のみならず、疑問に思ったことを発表し合い、疑問点の共有を図るべきではなかろうか。2点目は、第2部の第4～7時の「はじっこ」に係る問い掛けと話合いに関してである。指導者は、「はじっこ」をキーワードに学習活動を行わせ、「学校の広さを知るために学校のはじっこを探す」としているが、果たして授業の構成として適切であるだろうか。学校に関する興味・関心を高め、疑問を追究するようにするには、第2部の最初は、第1部であがった疑問点を解消する仮説を考えさせ、その仮説を検証する内探検の学習活動を行う方が、より適切ではなかろうか。3点目は、第3部の第17～18時の「友達の発表を聞いて、気になったところをもう一度探検する。」の学習活動である。ここでは、第15～16時で、「みんなが集めた情報を伝え合う。」といった活動を行っているので、「情報の確認と疑問点の解消」を目的にした学習活動を取り入れた方が、より望ましい授業構成になるのではなかろうか。

以上のことを改善案として取り入れた場合、表2の指導計画が考えられる。

本稿では、今次改訂された生活科に関して、大幅に変更された目標の構造や内容の見直し及び生活科の授業実践に係る課題について考察し、今後望まれる授業に関してより改善された指導計画を提示した。

今後、改訂された生活科の目標に対応して授業の実践がなされるわけだが、30年近く蓄積された授業実践・研究に基づきながらも、近年の生活科固有の課題に対応するよう、新たな授業を構築することが求められている。

【引用文献】

- 1) 文部科学省『小学校学習指導要領生活編』日本文教出版、平成20年、p.10
- 2) 前掲書1) pp. 12-13
- 3) 前掲書1) pp. 11-12
- 4) 前掲書1) p. 13
- 5) 小原友行・朝倉 淳共編著『生活科教育 改訂新版—21世紀のための教育創造—』学術図書出版、2013年、p. 2
- 6) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」2016年、p. 28
- 7) 前掲書6) pp. 28-29
- 8) 前掲書6) p. 30
- 9) 前掲書6) p. 30
- 10) 前掲書6) p. 155
- 11) 前掲書6) p. 155
- 12) 文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター「スタートカリキュラム スタートブック～学びの芽生えから自覚的な学びへ～」平成27年、p. 4

- 13) 前掲書12) p. 5
- 14) 前掲書12) pp. 8-9
- 15) 前掲書12) pp. 14-15
- 16) 前掲書 6) p. 157
- 17) 田村 学編著・みらいの会著『生活・総合 アクティブ・ラーニング』東洋館出版, 2015年, pp. 21-28

【参 考 文 献】

- 溝上 泰『生活科教育—21世紀のための教育創造—』学術図書出版, 1994年
溝上 泰・小原友行共編著『生活科教育 改訂新版—21世紀のための教育創造—』学術図書出版, 2000年
小原友行・朝倉淳共編著『生活科教育 改訂新版—21世紀のための教育創造—』学術図書出版, 2013年
田村 学編著・みらいの会著『生活・総合 アクティブ・ラーニング』東洋館出版, 2015年
文部科学省『小学校学習指導要領生活編』日本文教出版, 平成20年